

川上會員FAX文:補足「大事な事は物(F言葉: 圖))を生き物として附合ふ事である」(『人間國寶」序」より)
「物(左圖)」と「生き物として附合ふ(右圖)」との違い。

重要なのは、それが出来る爲には次の内容が必要となると言ふ事。…せりふの力學、換言すればせりふ(言葉・物)との附合ひ方、扱ひ方。即ち「フレイジング」「So called」「型・仕來り・生き方・様式」の用ゐ方の適不適で、場との關係(D1)を適應正常化(非沈湎)させる事が可能となり、また反對に適應異常化(沈湎)に陥らせる事にもなり得る。

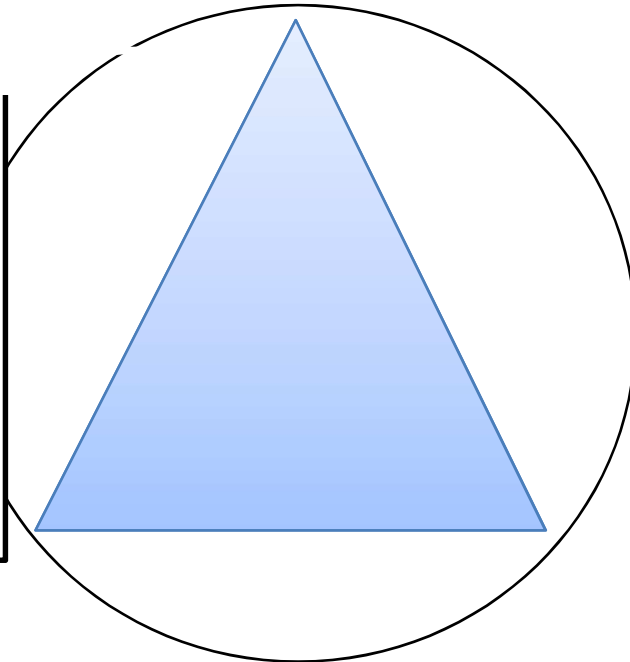
* 以下圖は人間(圖)が物(F・言葉・圖)に呑み込まれ「物との附合ひ」の距離感(E)を喪失してゐる状態。「物が單なる物にしか見えない」状態。

* 「物が單なる物にしか見えない様では、人もまた物にしか見えない」

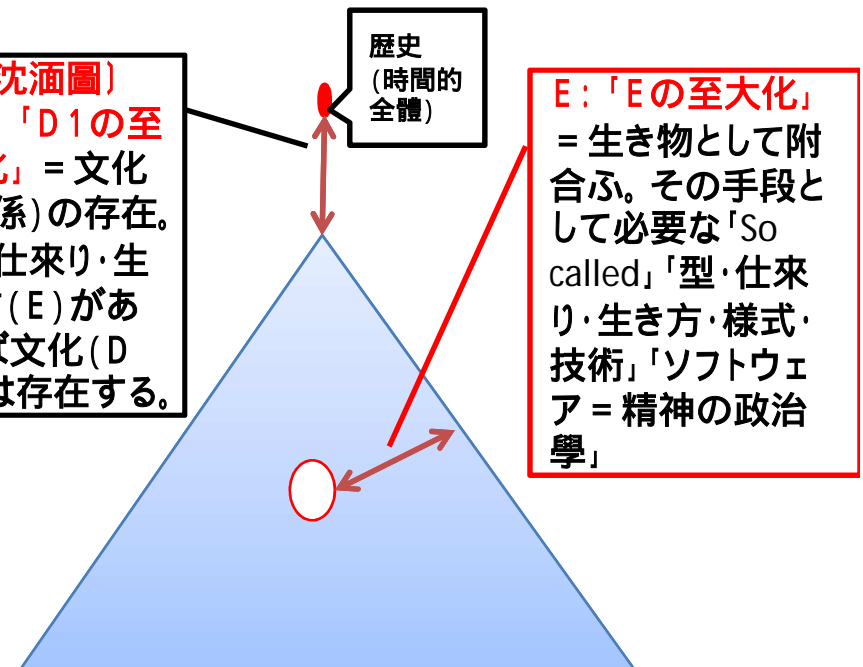
* 下圖は、「物(F・圖)を生き物として附合ふ」即ち、「生き物として」と言ふ、「So called」化、「Eの至大化=自分と言葉(物)との距離の測定」が出来てゐる状態。

* 「自分と言葉(物)との距離の測定が出来る」とは「言葉(物)を自己所有化する」と言ふ事。即ち、意識度を高くし、言葉(物)の用法に細心の注意をし、「言葉(物)を自分から遠く離す事によつて、逆にその言葉を精神化し、支配、操作する事が出来る様になる」(P391全七)。さうする事によつて「自分に近付け、言葉を物そのものから離して自分の所有にする事が可能になる」。

〔沈湎圖〕
D1の喪失
はEの喪失。即ち文化の喪失
= 型の喪失 = 物・言葉との附合ひ方の喪失…
「野蠻」
文明



〔非沈湎圖〕
D1: 「D1の至大化」= 文化(關係)の存在。
型・仕來り・生き方(E)があれば文化(D1)は存在する。

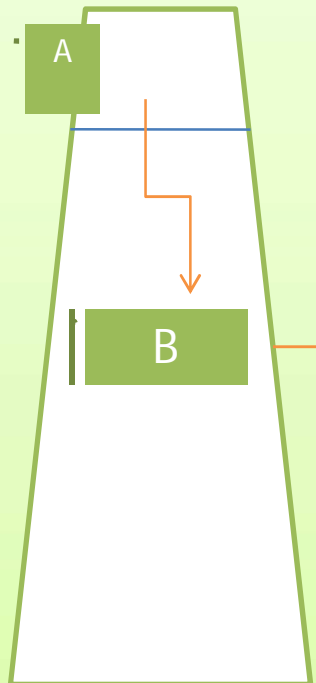


〈日本の精神主義構圖〉

$A \rightarrow B \rightarrow C'' = C2$ (西
歐概念の後楯化現象)

C2: 後楯・護符(西歐概
念 = 上位概念)

C''
絶対的自己肯定



「進歩・自由」(西歐的概念・新漢語)への適應異常・・・教育・西歐自然主義文學・戀愛等に對してと同一的「適應異常」現象と言ふ事では。そして、その原因として擧げられる事は以下の日本人の精神構造の特質である。

* 彼我の差を辨へず「自他未分の神道的生活態度で何にでもべたべた引つ付く」。それが禍し、實證精神によつての「テキストP8圖」化(「神に型どれる人間の概念の探究」)が叶はず、「テキストP9圖」に停留してしまふ。その結果「西歐的概念」は、「絶対的自己肯定」の爲の肯定因、即ち「C2: 護符・後楯」としての上位概念(世界・社會・階級、大思想)へと變質しまふ。以下参照。(参照: 左欄圖)

(拙發表文:『日本の知識階級』より抜粋)

恆存は、「日本の知識階級は言はば絶対的自己肯定者(C''自己主人公化)として終始してきた」と看破し、「私小説家・近代日本知識人、その典型としての清水幾太郎」の三者を、いずれもパターンは「テキストP9」の「日本精神主義構圖」だと言つてゐる。即ち以下の様に。

「現實(A)的不満 B: 逃げ處としての個人的自我概念 C''自己主人公化(自己完成: 絶対的自己肯定)」「詩神・護符・後ろ楯の思想: C2」自己満足・自己正當化(似非生き甲斐・似非實在感)。(参照: 左欄圖)

そして、彼等「絶対的自己肯定者はあらゆるものを自己の手中に収めようとして(權力慾)、その結果、自己の不満(A: 現實的不満)を處理する能力だけを失つた人間である。(中略)不満の原因は現實といふ客觀的對象のうちにのみあるのではないのに、彼等はそれをそこ(A的不満)にのみ見出さうとする。いや、さうする以外に能力も無く、方法も知らぬのであります」(『日本の知識階級』全5P369)。と、上記三者を當該評論で鋭く指摘してゐるのである。

そして彼等は「絶対的自己肯定」の爲に、その肯定因として「C2: 護符・後楯」を上位概念「世界・社會・階級、大思想」に求めようとする。何故ならば、西歐近代が否定因としての神を背景に持つに對して、前近代日本はそれを持たない。故に後楯による自己欺瞞が可能になるのである、と恆存は指摘するのである。